馬の甲状腺

北里大学獣医病理学教室出題　　第19回獣医病理学研修会標本No.303

動物：馬(サラブレッド)，雌，35才，イサベリン号
産地：イギリス，　繋養地：青森県七戸町，
剖検日：　1978年12月16日
臨床：本症例は1978年度，国内最年長馬であるという。剖検４日前より呼吸困難，衰弱著しくなり起立不能に進展し，斃死（老衰死），病歴は殆んどなし。

剖検所見：(1)肺は全域にわたって白黄色を呈し無気肺性で弾力を増す(2)肝・腎における著明なうっ血と実質の混濁(3)心重量3.5kg，赤褐色稠で混濁著明、右心房心外膜下に小指頭面大の不整白色巣形成(4)脾の濾胞萎縮及び粗大脾材増生(5)右側甲状腺の萎縮及び実質内大豆大白色結節形成(6)前腸間膜動脈における小児手挙大の寄生虫性動脈瘤形成(7)慢性化膿性子宮内膜炎。

組織学的所見：肉眼的に指摘された限界明瞭な白色結節は、組織学的にも薄い結合織性被膜に包まれた結節病巣で，圧排性の周囲甲状腺組織とは明らかに区別され得るものである。特徴的病像は大小種々な且つ種々な形状と濃淡性を示すコロイド濾胞の形成であるが，その病態は基本的に次の三相から構成されている。即ち(1)コロイドに富む大型濾胞からなるmacrofollicular colloid　領域(2)円柱状細胞からなる充実性乃至索状増殖領域、かかる増殖巣にはしばしば管状配列及び腺管構造形成が指摘される(3)その中間型と解されるmicrofollicular colloid領域(写真１)である。これら病態の構成細胞には明らかな異型性及び核分裂像は指摘されない。しかししばしばＰＡＳに弱陽性の胞体を備え，Davenbort染色で陽性の細胞が観察された。それは電顕的には多数の分泌顆粒(Ronald 1977によるtype Ⅰ，Ⅱに相当）を有し淡明な胞体として映ぜられるC－cell と解される細胞である（写真２)。即ち本病態にはC－cell hyperplasia　を伴っていると見做される。

診断：ＷＨＯの動物甲状腺腫瘍の分類(Sandersleben & Hänichen1974）に従ってfollicular adenoma（濾胞性腺腫)と診断した。馬における甲状腺腺腫は一般に老令との関連で報告されている(Huguenin 1927, schotthauer 1931, Joest 1968)が，(C－cell hyperplasia を伴っていることは，その発生に対する今後の検討が残されよう。